

岐阜調狂俳にかかる

先人たちの遺稿

狂俳の門

—昭和二十五年二月から十七回

文芸タイムスに連載 —

岐阜市共楽社所属

昭和二十四年四月十六日 立机

明治三十九年十一月二十五日生

芳樹園佳鳳 著

うもしつくりしませんので、それならばとい

うことで「狂俳の門」とつけてしました。

入門と云う意味にも通じて結構良かつたと喜んで居る次第であります。

いったい狂俳とは品位がないと云う一部の人達の批判もありますが、狂俳の狂という文字が頭の何処かにちらついていて、それが邪魔をしているので、変なものになってしまいますのではないかと思います。

むしろ狂俳には品と云うことが大切であります。聞いている娘が顔を赤らめる様な句は上品とは云われません。樗良翁の主唱した正調狂俳を汲んで育つて来た私達の狂俳は何処までも上品で、誰が聞いても美しい後味を残すものでなければならぬと思います。

この標題を決めるに当つて、初めは「狂俳を作つて見ようとする人の為に」と付けようかと思つていましたが、余りにも長つたらしいので「狂俳の話」と変えて見ましたが、ど思っています。

最初に断つておきますが、本当の初心者にのみ読んで頂きたいと云うつもりでこれから思いついたことを書いていきたいと思っています。これを読んで狂俳を一つ作つて見ようと發心される人が何人か出来たら有り難いと思つています。

この標題を決めるに当つて、初めは「狂俳を作つて見ようとする人の為に」と付けようかと思つていましたが、余りにも長つたらしいので「狂俳の話」と変えて見ましたが、ど

字詩にまとめることが良いのです。沢山作つて居るうちに自然と味も匂いも出てくるものであります。

開巻に始めて出席して自分の句が一句も抜いて貰えなかつたからと云つて、次の会から姿を消してしまふ人がありますが、長い年月の経験を持つている人の中に混じつて一度や二度で名を挙げようなどと云う料簡からして無理なんです。

今いっぱしに売れている先輩の狂俳作家達も始めから旨かつた訳ではありません。「芦舟」や「内国通信」等、時の文芸誌等へ投稿したりして、無駄なポスト通いを何回もして、やつと入選した経緯を持つている人達ばかりです。その努力あつてこそ尊いのです。

開巻に出てたまたま感じることは、新人を優遇する道はないものか、と云うことあります。新、旧が入り混じつて鎬を削ると云う

事は誰の目から見ても新人に酷な方法であるようにしか思えません。それかと言つて一諸に集まつた者同志の中で、差を付けて分け距てをすると云うことも考え方のような気がします。いちばんいい事は新人ばかりの集まりを作つて、その中で運座もし、批評もし合つて研究することが出来れば、それに越したことはありません。

実は、私の会社ではこの試みをやつて居るのです。気の合つた十人程の男女が度々寄り合つて、自分達だけの狂俳会を開いて居るのです。或る程度続けば結構良い集りになるだろうと期待している處であります。

こうして幾分でも下地を揃えてから本番に臨むのが順序のように思います。

何事によらず一番下の段を踏まずに、ひと跨ぎで階上に登ろうとしても、梯子はそういうふうには出来ておりません。

狂俳は世界で最も短い詩で、十二字を以つて成り立つて居ります。形式は七五調でも、五七調でもよろしい。俳句よりも更に短い詩が日本に存在していることは中々痛快であります。

狂俳は幽遠閑寂な俳句の味と、簡明率直な漢詩の特徴を併せもつて居ります。即ちいわゆる季題とか季の句と称して居るもので、題麗らか

寝た牛起きた牛震む

上の三字が題で、下が句であります。句の中には題の中で使われて居る語は一切使つてはならぬと云う約束があります。云い変えれば狂俳とは、課題を言外に含めた状景を詠るものである。と言つても差し支えないでしょ

う。

日盛　　風鈴だけに風がある
冬の庭　　何鳥か来てチチヒ鳴く

一読して俳句よりはるかに入り易いと感じられますことと思います。そしてこれは少し理屈っぽいなど感ぜられますかも知れません。然し狂俳はそんな片寄つたものではあります。頓智、機転全く如才なく、そして奇妙洒脱でよく人生の機微を衝いて余す処がありません。

嘘　　筆に狸の毛がまじる

狂俳は男女の情愛の濃やからを唄つて、都都逸の低級さ、冗長さの上に出ております。二番句を色句、恋句と云われるのがこれであります。

ともすれば　　筆に狸の毛がまじる

やつれ　　弱い歸めつけて居る

玉の輿　　汚れず笑いた品匂う

笑凹　　達う日の鏡袖で拭く

但し、表現が十二字に限定されている為に未完成語がありますから適当に想像を逞しく

して、縦横に句を鑑賞する楽しみがあります。

狂俳は日常生活を描いていて、人情の機微にふれ、軽妙さは「穿ち得て妙なり」と感嘆せしめるものを有しております。

友情

泣きに来なんだ除夜が明く

眼

節の穴から噂立つ

さっぱり

昔罕では世に勝てぬ

おそらく誰しもこれに似た経験をもつてお

られることと思います。

狂俳は率直に眞實に乗つかって簡明に表現するところに、汲んでも尽きない潤いがある訳であります。

狂俳は更に教訓的な格言とか、寸鉄人を殺すような標語に近いものを包含して居ります。

にこにこ

大器點して噂らぬ

日盛り

蟻は不斷の努力積む

汗

美しい金子拾つとる

榮冠

努力の汗が実を結ぶ

冬木立　世は耐芝の姿なり
狂俳は又時局的な題材を詠うのに吝かであります。

漢然

国是民主化消化せぬ

一番槍

供出の榮莞爾たり

四面楚歌

國政の難航づく

廻らぬ金

新興の夢蹴つまずく

狂俳はこの様にあらゆる角度から存分に詠み尽すことが出来て、和歌の雅びと、俳句の寂と、俚謡の情とを兼ね備えたものを詠み得るのが特色であります。

しかしながら狂俳は句の最後を名詞や代名詞、或いは形容詞では止めないことが重要な条件であります。極く初心者の中には

舞う蝶々

春だけなわの菜の島

等と詠つたりする事がありますが、これは名詞止めでありますから

舞う蝶々

菜の花十里春深い

とても直さなくてはなりません。兎に角、動詞か、助動詞で止める事を原則としなければなりません。ときたま「律めな」とか「円満じや」等と止める人もありますが、これは極めて少ない例で、従つて句の品位も高尚ではありません。初心者が真似るとんでもない迷句になりますから心すべきことです。

動詞で止めるためには次の十四文字で必ず止める句を理想としております。

「る、い、く、ぬ、す、む、な、つ、ゆ、

う、り、ふ、ん、な」

さて、ここからは便宜上分類して狂俳の作り方について述べることにします。

一、季句

季節を有している題で俳句に最も近いものであります。「松の内」という題が出たとしますと、松の内に生ずるあらゆる風景、行事、

心境等を詠るものであります。この際「松の内」と云う題の中の漢字は使用してはいけないであります。即ち

門松立てて賑わしい

歌留多会和氣内に満つ

等と詠んではいけないのであります。

① 羽子に明け歌留多に暮れる

② 歌留多に若きはづみけり

ならば良いのです。それでは

してやられたり嫁が君

この句はどうでしようか。これは最後が名詞止めで規程に外れておりますから

③ 嫁が君こつそり覗く

とても直さなければ、句として成り立たない訳であります。

季句を作るには先ず歳時記を備えて下さい。季感については各人異なる場合もありますが文学的見地から編纂された歳時記を指針とす

るのが定石であります。

季節の動き位い知らなくて句が作れるか、
と放言した揚句の果て、「花野」を春の花咲く
野と混同してとんだ物笑いの種を残すといつ
た事になります。「月」と云えば殊に四季の中
で一番さやかで清い秋の月のことと、その他
は春の月、朧月、夏の月、月涼し、盆の月、
冬の月、寒月、凍月等と季の語を冠すること
になつて居ります。冴える月とは沢てつく様
な寒さを感じる冬の月であり、冴え返る月は、
少し暖かくなりかけたと思う間もなく急にま
た寒さがぶり返して来たときの月で、三月頃
の季に詠む月であります。

このように季題については慣例で踏襲され
た一面があつて、單に天文学上の分類とは大
分かけ離れたこともあります。

春光 萌野の果に海展く

涼風 手枕近う簞り照る

短か夜 紫陽花の花より白い
梅雨 鶏舎にこぼれ麦芽吹く
霧 洗笛で船が船探す
時雨 薄れ陽の瞬き寒い

二、色句

所謂二番句、恋句とか艶句と称するもので
男女の交情濃やかなものか、又は女性美の表
現を目指すものであります。

愛してね 膝へ崩れて日和見る

嬉し恥かし 泣んで出た茶に波が立つ

ねえ貴方 五年も明けぬ夜がほしい

随分と誇張がひどい様ですけれど、確かに
真理を掴んでいるところがあります。すべて
狂俳は作つたら頭の中に状景を描いて見るこ
とです。名句は必ず絵にして名画になる筈
です。それから何廻も読み直して無駄はない
か、もつとうまい表現はないものかと工夫を

致します。二十年三十年と云う古強者と同じ

ように一夜作りを真似ても望みない事です。
たまたま工夫し過ぎて題意を失つてしまつた
り、理屈一方につまざますが、そうし
た中でひとりでに句感も軽妙も会得していく
ものであります。

この色句については相当経験を積んだ先輩
方でも仲々創作に苦労をして居られます。

ねえ貴方 うちの女房にや一寸聞けぬ

でも良いけれど、色句としてはやつぱり甘
い、なまめかしい句が作りたいものです。

涼しい眼元 男幾人殺される

百向半分 觸れたら意外花は散る

この色句作詠には映画廣告等が良い智恵を
貸して呉れるものです。

待った 飛車凹む程押えどる

と云う句についても、これを凹むの変りに
「懸命に」と用いても「命がけ」と云つても
「凹む程」の力は出て来ません。

三、情句

人情の濃やかさを詠つたもので、軽妙洒脱、
よく人の顎をゆるめる力を有する名吟は多く
この種類に属します。

流行 やれやれ 警眼それた荷が重い

涎れ 嘘し涙 ウィンドヘ妻へばり着く

近い 青酸加里の置場ない

存外 裸の嫁が見当らぬ

言葉の持つ力を狂俳程はつきり見せてくれ
るものはありません。ですから狂俳に用いる
時は充分工夫してもらわねばなりません。

蚊帳の中

でつくり悟氣坐つとる

27

「てつくり」と云う言葉が創造されておりますが、この「てつくり」と云う言葉が実に良く似ています。このように僅か十二文字で仕立てる狂俳ですから作句に当つては用語の使い方に充分注意しなければなりません。

四、道句

道徳的な教訓等を詠んだ句で、格言、標語、諺等を含み、やや堅苦しい感じのする句が多くなります。

誠 天も無形の力貸す

幸運児 育ての親に両手つく

鋏 精農常に錆寄せぬ

何事も たゆまぬ努力岩穿つ

ややもするとすぐには意味を判じ兼ねる句も出て来ます。孟母三遷、蘆生の夢、三顧その他漢文等から引用された古事、諺等中国から伝承された言葉や歴史、その他多数の人の

目について行くためには勉強する事が沢山あるのです。先輩の句等で判らない事は卒直に聞くことあります。知らない事をそのままにして置かないと云う事が大切な学び方だと思います。

この道句を作るうえで俚諺等もなかなか良い事を教えてくれます。

登りつめれば峠につきる

花も咲ききりや散るばかり

泣くな人生笑うな浮世

悟りや師走も春もない

住めば都よりガラスの鉢に

金魚尾を振る鰐を振る

こうして句種を探して歩きますと、堅苦しい題にも、材料は意外と落ちているものがあります。

五、時句

時局を表現する句で、新鮮な今の時代の社会、世相と云うものの特色を掴んで詠むものであります。

六、神祇句

平和主義 アジアのスイスで村興す
あの手この手 開列車ブレークリカぬ
民主主義 明るい國の扉開く
涼しい風 橋で内閣すげ替える
健なか 夢が異國の丘探す

も社会の淨化に一層發奮して頂きたいものと強く念じます。

神や仏に關係あることを詠んだ句で通称三番句と称される句のことです。これは定座の三番に据えられるからで、句意も表現も軽率にならないよう気品高く詠い上げるよう心掛けることが大切です。

世の中は日進月歩で狂俳も時代に取り残されてしまいません。現代を詠むことによつて自らを返省し、よりよい月日を築いてゆく願いは国民一人一人の願いでもあります。狂俳と云う文芸の中で表現出来るのは全く痛快なことだと思います。

終戦以来美しい物、美しい心、美しい風景が次第に薄れつづある世状の中でも少なくとも狂俳の様な風雅を楽しむ私たち同志は是非と

石 心の願い抱き上げる
榜 鳥帽子が飾り海老撫てる
運 うそ替えの耳朶撫てる
響く柏手 刹那は神の意に触れる
先ず先ず 有り難かつた京咄
素晴らしい 理學日本が湯川生む
呑み込み 罷は吾れにと宣まえり

尚三番句の中では貧富厭いなき大人物の句を扱うことがあります。

七、難題

通常では判断の出来ない様な題を出されることがあります。これはあまり題にとらわれず、さりとげて狂俳の妙味を發揮することだと思います。頓智即妙の味はこの狂俳によって満喫させられます。

碧湖の埋立て 富士釣り寄せて庭築く
舟便ふねびんを運転に乗り 挂け待ち舞台忙がしい
氷の天ぶら 醉客よひきが板場を泣かす
羅漢らかんの度談会 地獄じごくえも中繼ちゅうけいされる

八、天地・折等狂俳俳句

狂俳とともに募集される俳句で、選者は主に十番に据えることを常道としていますが、俳句ですから季語を入れなければなりません。天地及び折の外に漢字の一字詠み込みの三種類がありますが、それぞれに約束事がありますから順次説明を致します。

例句 「タシ」 谷渡す吊橋揺れて青嵐
ります。

折

(二) 折の課題も仮名三文字で発題されます。上の字で上五文字の頭、中の字は中七文字の頭、下の字は下五文字の頭の発音になる

ように課題で出された仮名文字の音を俳句の節々の頭に詠み込んで、俳句を折ると表現したものであります。

例句

折 ヨウカ 佳き人の 団扇おうぎに笑くば
隠カクれけり

折の場合も天地の場合と同じように上五文字の中に題の仮名をまとめた熟語で詠み込むことは許されませんので心掛けなければなりません。

例句
折 オホロ 脣夜おぼろよの……
この使い方は許されないと云うことあります。

尚、課題の中に「折ヒ」等と出されることがあるが、これは「折ヒヒヒ」の省略したもので、次のように詠い込みます。

折ヒ 灯ヒの揺れて雛ひなの金冠きんかん光りけり

一、天地

これは天地として仮名二字で出題されます。上の仮名を俳句の頭の詠み始めの発音にし、下の仮名は句の末尾、止め字の発音に使う訳であります。例えば「ウメ」という題が出た場合「歌日記書くや旅籠りょろうの花の雨」と云う様に詠います。ただしこの場合に題の「ウメ」を句の出だしで「梅咲くや」とか、「梅の花」等と二字共使つたものは許されません。「謡洩うわせるる」とか「美しき」と云つた様に一字だけを使うことあります。

例句 「タシ」 谷渡す吊橋揺れて青嵐

(三) 漢字一字詠い込み

天地、折とは別に漢字一字を詠い込む俳句であります。課題の文字を季語に使うことは許されません。「竹」と云う題に対しても「若竹」とか「竹の春」と詠うことは良くないと云うことで「竹垣・竹竿」と云つた季語にならない使い方を工夫すべきであり、特に一字詠い込みについては出題者の方で良く研究したうえで発題することが何よりも大切なことであると思います。

天地 ホク
時鳥鳴くや山また山の奥

一字詠み込み 合
唄うたいもしかこらいもし春灯下

○ いろいろと初心の方々を対象にして述べ

てきましたが、これからは句の良し悪しについて私なりの鑑賞を加えて見たいと思いますので、かなり辛辣な言葉も出て来ようかと思いますが御容赦願いたいと思います。

青田 溢れる堰を鷺のぞく

待望の白雨が一過して、村から村へ大跨ぎした虹の鮮やかな彩りの下の青田に涼風が湧き、水は溢れる様に堰を越す辺り、どじょうを漁る白鷺一羽、まことに清涼の画面が良く詠まれております。

夏の夕 橋で内閣組み直す

浴衣あり、アロハ有り、半裸あり、団扇あり、老人あり、小母ちゃんも居る、昼間の暑さを忘れようと川風を恋いて集つた月の有る橋の上で、折からの内閣總辞職を話題に論議幾刻、遂に組閣を行つた精進ぶりには本物の

組閣本部が顔負けするであります。まさに、この納涼風景は面白く、楽しく詠まれております。

ひそひぞ出 嫁が涼みに出損なう

蒸し風呂のような昼間の暑さも去つて、半裸で済ませた夕餉の後の一時、山を掠めて昇る月を募つて寛ごうとした嫁女の目に映つたものは、門先きの涼み台に姑と小姑のひそひそ話、心に何の咎めることのない嫁女ではあるが、気に掛ること甚だしい、涼みに出損なつた嫁女の間の悪い顔が目に浮かんでもことに良く詠まれていると思います。

鳴く蛙 国太らせる苗若い

蛙が最も喧ましく鳴き揃うのは春の交尾期でありますから歳時記で蛙と言えば春の部に入れてあります。若苗は早苗とも云い、苗代

(春季)から田に移して植える頃の稻苗は夏の部に入ります。田植え過ぎても蛙は鳴くには鳴きますけれど、季題としての蛙は春でなければなりません。ましてこの句の評を見ますと「五月雨つづく農夫一心」とあって、季観的なものがますますぶち毀しとなつております。

ら夏の風景に使う時は「夏の霧」と云う様に季語を冠せないといけない訳であります。

またこの句の評に「盟のよくな旭押し上ぐ」とありますのが、これも秋の季でなければ見られない状景で、夏の朝の感じとは程遠いようと思われるのです。

世相の厳しさに追いたてられて、ともすれば心のおちつきをも失い勝ちな中につけて、

この句も前の句と同様、稻の場合だと霧が多い程稔り豊かと云いますが、麦に霧は絶対禁物で、実らないとさえ云い古されています。この題が「穂孕む稻」であつたなれば秀逸句に値するでしょう。

穂孕む麦 夜上りのした霧ふかい

この句も前の句と同様、稻の場合だと霧が多い程稔り豊かと云いますが、麦に霧は絶対禁物で、実らないとさえ云い古されています。

この題が「穂孕む稻」であつたなれば秀逸句に値するでしょう。

夏の月 霧の海から橋が浮く

これも同じ誌の高番にランクされて居りますが、「霧」は秋季に属するものでありますか

初心の方はなる可く理論を抜きにして、いきなり作つて見ることが大切だと思います。何でもかまわず、とにかく作つてみようと努力

することです。道はそこから開けて来ます。狂俳は誰にでもすぐ作れそうです。優しいと云えばたしかにやさしいし、難しい一面も有るでしよう。

狂俳の門は誰でもすぐ潜れるのですが中に入つてみると、そこは意外と大きくて広いのでどつちの方へ向つて歩いたら良いのか見当がつかず迷い子になつてしまつた人もあります。入り易いが達しにくいと云うのが本音かも知れません。そして生涯判りましたと云える時もないと思います。それだけ深みもあり、面白味も有るのが狂俳であると云えます。何だか括り際にきて理屈っぽくなつて来ましたが、見た眼にはやさしい狂俳の道も深くなければ一つの苦業であります。しかし初心の方は始めからそんなに堅苦しく考える必要はない、むしろ趣味として楽しみ気軽に作りになる様お奨め致します。鉛筆と紙さえあれば

何の準備も要りませんし、どんな境遇の方でもすぐお始めになります。ただ一つだけ御注意申し上げて置きたいことは、自分の句の良し悪しは自分では判りにくいもので、ややもすると独りよがりの句になつてしまいますが、それを防ぐためには親しい先輩か友人に見て貰い、批評してもらつたり、直してもらつたりすることが大切だと思います。
どんな道でも広くなつたり狭くなつたり、糺余曲折はつきものです。努力し頑張つてみることだと思います。

狂俳雑感

秀逸見返の探題について

如月庵 小川梅溪

(昭和二十五年六月記)

一、遺訓にも秀逸は必ず当季たるべきこと(即席など課題の少なき場合などは例外)高尚にして俳味津々たる句を据えるべし、とある。

見返は十外第一の所謂秀逸であつて、巻頭秀逸に準ず可き句である。されば矢張り季を有する秀句を据えなければならない(見返は他季の句にして優秀なる句があれば据えること、又当季にして秀逸に優る様な句は遠慮すべし)

何時の場合でも近評に於いて最も批判の目標となるのは秀逸と見返しの探題であろう。

開巻当日大書掲示してある探題中、先ず秀逸並びに見返しに季が有るか、季が無いかが問題になる。若し季の無い探題であらうものなら、直ちに其の選者の粗漏と受け止め、社選を攻められ、甚だしきは其の評者の真価までが論議されようとするものである。評者は絶対注意しなければならない訳である。

今茲に先哲先輩の遺風を綜合して秀逸、見返の句を検討して見ようと思う。

二、俳祖樗良翁は俳諧の名人とまで謂われた人であつて、此の翁が俳諧に多くの人を引き入れんがために一つの手法として、即ち手引草として冠り付けなるものを創設せられ、初心者の指導をせられたものであるが次第に平民文学となり、一つの俳諧形態を

持つた今日吾々の狂俳である。

前句と云う名称の語源も此處にある。

三、それであるから秀逸は俳諧に於ける立句

である。故に秀逸はその課題と共に一句の

俳句とならなければならぬ要件が必要であ

る。(十位外の第一号である見返も当然これ

に準すべきことは勿論である) 俳諧に於い

て立句を補佐する二句目を脇句と云う。

脇句は立句に対し必ず季を備えた句を

据えられる訳であるが、この脇句こそ狂俳

の探題なのである。

俳諧の例

- イ、立句 卵の花の雪に間の動くらん
脇 一声捨てて保伎飛ぶなり

- ロ、立句 涼しさや海も野山も月一つ
脇 同じところで夏の水音

樗良翁の事ども

昭和七年八月五日

暗香亭梅溪著

無為庵樗良翁は俗称嘉右衛門と云えり、出生は志州鳥羽の城主稻垣対馬守殿の家老稻垣弥惣右衛門の普代家来三浦勘兵衛の子なり。

嘉右衛門十四才のとき父勘兵衛が故有つて永の暇を賜わり、其後翁は中年の頃を伊勢山田岡本町妙光寺辺に寓居して西藤又山田清と云う煙草入商の貢草入れの画を書いて、いさかの活計の助けにされていたという。その頃、伊勢松坂に国風舎と云う俳諧の道場があり(中略) 椅良翁ひとりはせを翁の風を執行し、画は蕪村翁に習い、遂に正体風真面を得て中興の宗匠ともてはやされしなり。其の頃國風舎の舍長乙由、関東より來たりたる行脚

ハ、立句 握めくる水も緑や若葉山

脇 一声鳥(時鳥)の声も啼く

二、立句

ホ、立句 朝日にとぶ山ほととぎす

脇 穂孕みし稻の夜明や初涼し

ホ、立句 白滝に一枚さして若楓

脇 澄み切る空に消え入る月

翁の逸事多あり、先ず一、二を記すに、

天明の頃なり、翁は岡本町向山上善寺の麓に

翁の句

兵法を使つて見たき野をかな

嵐吹く草の中より今日の月

立白のぐるりは晴し夕しぐれ

古句鑑賞

昭和五十一年九月号 横流誌から

花里

撞かれて西す陽に対す

優を睨み

大笑い

盆洗へ猪口沈まかす

光り

控え室には吳越ない

嫌なお使い

鍋炭のよな空割れる

朝湯

夕陽に尺を入れておる

物よう云わぬ馬塞い

娘も余所の人になる

酒

柿一つ淋しう残る

兵法を使つて見たき野をかな

一つの草庵を営み住めり、庭前の大木なる榎の木ありしを以つて榎庵とも云えり、我庵集の巻頭の表に「我庵は榎ばかりの落葉かな」と云う句在りしを見ても証明すべし、此集は

診重のものなり又翁諸国遊歴のことは彼の集を見る者よく知るところなり、京都へも度々

来て蕪村翁等との俳諧多かりし、又或年高弟宗居を連れて東武へ下りけるとき箱根の関所

にて、僕は伊勢の國樗良と申す俳人にて候が此の度江戸表へ修業に罷下り候えば御通し下され度、と申入れしに、閑守さては貴殿が樗

良翁なりしや高名は兼ねて能く聞き知る伊勢国には宗居と云う俳人も在る由聞き及べりと

云うに、供なるが即ち宗居なりと云へば弥よ妙なり、宿は閑所の表なれば裏へ廻るべしとありければのち勝手へ廻りしに、爰は役所のことなれば御宿と云うても叶い難し、茶粥なりとも参らすべしゆるゆると今宵は語り申さ

ん、と懇ろに申さる由兩人草鞋を解き打通り俳諧に及び、翁挨拶の句に、

閑守の耳かしましと水鶏哉 樗良

窓吹く風にかをる明方

閑守

海近き山にしばらく休えて 宗居

此夜面白く語り明して翌日暇乞して再会を期したりとなり。

翁の句（樗良翁発句集）

我が庵は榎ばかりの落葉かな

降り初めてふりもさだめず初しぐれ

名月やげになきけありあわれなり

見れば曇見ねば晴れゆく月見哉

虫ほろほろ草にこぼる、音色哉

さて、始めて戻つて翁は三十才にして紀州長島の無敵斎百雄に師事す、木本に居る事一年、江洲より加賀に遊び、三十四才伊勢山田に無為庵を結ぶ、三十五才より北陸、江戸、

挾捨より北陸を歴訪、四十五才京都に至り初めて蕪村一派と遊ぶ、四十八才北陸に遊び月の夜、菊の香、時雨笛、仮の座等を著作、四十九才は京都に在り一日行脚、花七日を刊行、次いで越後、越中、加賀を歴訪して京都に至り、まだ雁を刊行、五十二才山田に帰りて十一月十六日病没す。山田寿巖寺に葬る。姓は三浦、名は冬郷、通称勘兵衛、玄伸無為庵、一米廬、榎庵の別号在り。

樗良翁が岐阜に來りて冠句を指導せられしは天明二寅年二月十一日より約八ヶ月余滞在同年十一月中に帰御せられしも美濃路に於ける滞在記録は書物により知る事を得ず、これ

は短時日なりし為か、當時冠り付なるものの他の俳人達が興味を持つて認めざりしか、美濃路に於ける作句集の發見せざりしこと等によるものならん。

此の翁は貞門の流れを汲む人であったと見ても大過なかろうと思う、兎に角貞門の洗礼を受け、地方俗人仲間に流行した冠り付等を楽しみにして宝歴九年と云う俳道の衰微した時代に紀州の一僻地である木本を本據として白頭鶴集を編輯發行せられた、此集句は名吟集とは云えずとも俳諧の暗黒時代を切り開く極めて貴重と云わざるを得ないものであろう。當時伊勢派一派を創設した麦林舎乙山の勢力は牢乎として抜くべからざる時代に樗良翁が伊勢派伝統の重衣を突破し勢陽唯一の巨人となられた所以は慥かに傑物であろうと認められる。